

[研究ノート]

ディスコースからみるアートプロジェクトの社会的意味： 葉山芸術祭を事例として

The Social Significance of Art Projects from a Discourse Perspective:
The Case of Hayama Art & Music Festival

館 美月

Mizuki TATE

キーワード

アートプロジェクト、ディスコース、コミュニケーション
Art Project, Discourse, Communication

Abstract: This study aims to analyze the distinct discourses around a long-term art project (AP) called Hayama Art & Music Festival and explore the social meaning. The project is held around Hayama, Kanagawa prefecture, featuring a number of exhibitions and workshops over the period of a few weeks every spring. This paper uses literature search, interviews and a field work to collect various narratives and nonverbal data such as experience of field work, and analyzes expressions emphasized in them by multimodal discourse analysis. The result of the analysis shows the project's discourse is that of "inheriting". This discourse revolves around the desire to convey art and AP to future generations. In order to realize this vision, efforts are made not only to document the trajectory of AP as a record but also to make the festival a personal matter for people in the community and to make a relationship to inherit the festivals. The crystallization and establishment of the discourse on the art festival in the local community are being promoted through the visualization, symbolization, eventization, and ritualization of that discourse.

1. 序論

1.1. 研究の背景・目的・意義

現在、アートプロジェクト（以下、APと表記する）は多種多様な活動、体系、規模で存在している。1990年以降、次々とAPは生まれてきたが、地域住民との摩擦やマンパワー・運営予算不足などが原因で活動の継続に困難を抱えるプロジェクトも少なくない。そこで数少ない長期的活動をしている葉山芸術祭を調査対象として、そのプロジェクトの特徴をみていきながら、マルチモーダル・ディスコースアプローチ（Kress & Van Leeuwen, 2001）を用いて、継続的活動が可能な芸術祭に特徴的なディスコースを明らかにすることを目的とする。加えて、APが地域というコンテキストにおいてどのような意味をもちうるのかを考察する。

APとは、社会的つながりをもちながらサイト・スペシフィック性¹を重視し、協働や共創という活動を通してコミュニケーション、コミュニティをつくりだす取り組みである（館, 2022）。その例として、瀬戸内国際芸術祭や大地の芸術祭越後妻有アートトリエンナーレなどが挙げられ、これらは一般的に開催地へ足を運ぶきっかけやアートにふれる楽しいイベントとして受け入れられている。APの学術的扱いを概観してみると、APは芸術活動の一つであると同時に、経済活性化の手段（日本政策投資銀行・瀬戸内国際芸術祭実行委員会, 2013）、観光業の活性化の手段（川崎、越智, 2021）、都市計画の方法（吉本, 2004）として研究されている。このように、APは多角的に領域を横断して分析されているが、ディスコース分析した研究は管見の限りみられないため、本研究はその新たな側面を見出す契機となることが期待される²。

ディスコース分析は社会構成主義に立っており、その前提として、実証主義への懐疑的姿勢、科学主義的ディスコースの反省と批判がある。研究者もまた、社会の関係性の中にいるため、中立的な立場とはいえない。研究者が生み出す言説的实践も社会的に構成されており、社会性から逃れられないため、内省的な姿勢を保ちながら研究することが重要である。さらに、ディスコースを読み解いていくためには、データ収集・分析方法の手続きの透明化とコンテキスト理解が必要である。そのために、筆者は葉山芸術祭を研究するにあたり、研究者としてはもちろんのこと、鑑賞者、企画参加者³といったさまざまな立場に関わることで、より多角的に分析できるようにしている。先述したようにAPはさまざまな課題を抱えているが、筆者の研究（館, 2020, 2022）や多種多様なAP関係者へのインタビューやフィールドワークを通して、プロジェクトに関わる人々や開催場所となっている地域に対するAPのポジティブな効果を確認できたため、肯定的な視点でみることが多い。したがって、上記の点を内省して分析と考察をおこなうようにしている。なお、本研究は筆者が所属する研究科の倫理審査委員会の審査を得たものである。

1.2. データ収集方法

葉山芸術祭に関わるヴィジュアル資料、フィールドワークで観察した出来事、プロジェクトに関わる人々の語りといった多種多様なデータを用いた。箕浦（2000）を参考にしながらフィールドワークとインタビューを実施し、マルチモーダルなデータ収集を心がけた。

フィールドワークの対象は、葉山・豆子・横須賀・鎌倉周辺を会場とする葉山芸術祭である。筆者は展示鑑賞、複数のワークショップ参加、青空アート市⁴見学を鑑賞者として実施した。一時的に企画参加者としてワークショップへ参加したり、インフォーマルな企画参加者との食事会に加わったりした。フィールドノートは、参与観察中または帰宅直後に記入した。実施時期・回数は、2022年5月に1回、11月に1回、2023年3月に1回、5月に2回の計5回で、総時間は20

時間であった。

参与観察と並行して、プロジェクト関係者⁵1名との半構造化インタビュー、10名（企画参加者2名、鑑賞者2名、地域関係者6名）との非構造化インタビューをおこなった。前者は、インタビューの職場にて1時間程度で実施し、内容をメモするとともに、書き起こしのためにICレコーダーで録音した。後者は、インタビューの自宅、作品展示会場にて実施し、手書きのメモで記録を取った。加えて、資料調査で得られた情報との関係性も考慮しながら、分析解釈する上で重要となりうる概念も記載した。

1.3. 分析枠組み

マルチモーダル・ディスコースアプローチ (Kress & Van Leeuwen, 2001) を採用し、相互言説性を概念として用いながら、箕浦 (2009)、清宮 (2019) も参考にして、分析、解釈をおこなった。分析方法について説明していくと、特に繰り返し語られていたり、出来事のなかで繰り返し起きていたり、何度も表象されていたりするなどといった形で強調されているキーワードや表現に注目し分析を進めた。また、インタビューが強調する部分や重要だと思っている点を分析対象とした。

一般的にディスコースとは、社会的な対象を現実に至らしめる記述のまとまりや相互に関係するテキストのまとまり、構造化されたテキストであり、それは様々な形で関係づけられたものを生産する (Parker, 1992)。ここでのテキストとは、言語学の立場からいうと、特定の社会的意味を伴った意味上の単位 (Halliday & Hasan, 1976) であり、批判的談話分析の立場からいうと、意味を生み出すあらゆるもの (Fairclough, 1995) である。テキストは、書かれたものだけでなく、日常会話などの話されたものや写真やシンボルなどの表象も含まれる。コンテキストとは、文脈、場所、場面、人間関係、共有知識などといった状況や空気感といったものを指す。APにおける具体的な例をあげてみると、テキストは芸術祭のロゴマークやパンフレット、展示内容、ワークショップでの出来事、インタビューでの語りなどがあり、コンテキストは芸術祭の特徴、芸術祭の会場となる地域の特性、プロジェクト内の人間関係などがある。テキストの意味はコンテキストの中で生成・解釈され、関係性の中で変化していくため流動的で、特定のコンテキストにおいて定義される限定的なものである。テキストの意味は単独では存在せず、他のテキストとの関係性のなかで生成されるが、この関係性は間テキスト性と呼ばれる。ディスコースには意味のまとまり同士が相互につながる相互言説性があり、ディスコースが形成されることで社会的現実が構成されている。

マルチモーダル・ディスコースアプローチは、ディスコース分析にマルチモーダル・アプローチ (multimodal approach)⁶ の視点を組み合わせたもので、言語以外のモードが多様であり、複合的なモードを含んだ対象の分析に特に適している。視覚イメージや音楽、音、触感、行動、身振り、図表などといった幅広いモードをテキストとして扱い、分析する手法である (八木, 2011)。例えば、Kress & Van Leeuwen (2001) は経験的意味生成の可能性 (experiential meaning potential) に着目して、子ども部屋を分析して家族生活のディスコースを明らかにした。子ども部屋で使われている色や部屋の配置、その部屋でいつだれが何をしているかを分析対象として、社会階級や人種などのディスコースと関連させながら、家族生活のディスコースを示した。このように、言語で示されたデータだけでは立ち現れてこない現実の可視化、緻密な分析が可能となった。マルチモーダルなテキストの分析・解釈を通して、そこから生成されているコンテキストやディスコースに着目しながら複雑な現実を理解して、その社会的意味を読み解く

アプローチである (Kress & Van Leeuwen, 2001)。本研究で分析対象としているAPは、常に形を変化させながら活動するプロジェクトで、作品そのものだけでなく制作の過程を重視しており、アートを通して生まれたコミュニケーションや人々の関係性もアートの一部と捉える特徴がある。このように、アートやAPは言葉だけでは換言できないものを表現しているため、マルチモーダルな視点の分析が必要となる。加えて、分析するデータはフィールドワークでの出来事やインタビューで語り、プロジェクトのロゴマークやパンフレットなどと幅広く、多様なデータを組み合わせることで立体的にディスコースを浮かび上がらせるため、このアプローチは有効である。

2. 葉山芸術祭

2.1. 葉山芸術祭概要

葉山芸術祭は4月から5月に葉山・逗子・横須賀・鎌倉周辺を会場として、地域住民を主体にアート作品の展示、ワークショップ、青空アート市場、音楽祭などを開催している。作品の展示形式はオープンハウス⁷、オンラインや屋外などでのアート作品展示がある。活動の目的は、住民が主体的に活動しそれが地域社会につながることで、自由な表現が多様な交流やつながりを育み、地域の芸術・文化意識の深まりや成長を促進することである。このプロジェクトは民間の文化振興団体の一葉会⁸によって始められ、主催は葉山芸術祭実行委員会⁹で、後援は葉山町（一部共催）、逗子市、葉山町教育委員会、逗子市教育委員会である。プロジェクトを運営する葉山芸術祭委員会に事務局と葉山芸術祭調査研究プロジェクト (HAFS)⁹が位置する。実行委員会は、教育、環境、地域の三つの柱を重要視して活動している。

170

2.2. 葉山芸術祭の変遷

『葉山芸術祭データブック 1993-2015』で芸術祭の変遷を「草創期」、「転換期」、「成長期」、「安定期」の四つの段階に区分している (図1)。

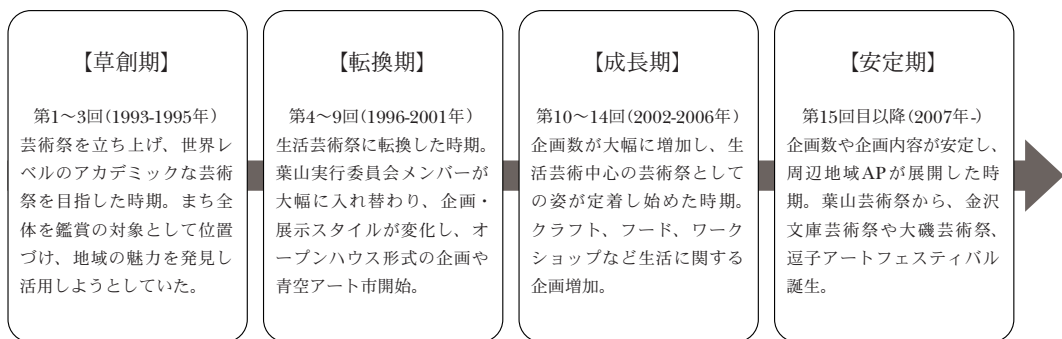


図1 葉山芸術祭の変遷

出典：山崎稔恵他、2016、『葉山芸術祭データブック 1993-2015』、関東学院大学、相模湾・三浦半島アートリンクプロジェクトを元に筆者作成

2.3. 葉山芸術祭の特徴

昨今、さまざまなAPが立ち上げられているなかで、他のAPと比較した際に挙げられる葉山芸術祭の特徴的な点を『葉山芸術祭データブック 1993-2015』をもとに下記に述べる。

- ① 豊かな自然環境と多様な人的資源・文化資産を背景とすること
- ② 行政が関与しない地域住民の地域住民による地域住民のためのプロジェクト
- ③ 当初伝統主義的芸術鑑賞からスタートしたが、現在は生活芸術中心の祭りであること
- ④ 地域の中に、表現者、鑑賞者、つなぎ役が存在すること

これらの特徴と関連させて葉山芸術祭の特徴的なディスコースの分析をしていくために、葉山芸術祭に関わるさまざまな人々の立場性の前提について確認しておく。大きく分けると、企画参加者、鑑賞者、つなぎ役¹⁰、地域住民¹¹がいる。筆者のフィールドワーク、HAFSの調査によると企画参加者、鑑賞者の半数以上が地域出身者・在住者で、つなぎ役の5名全員が周辺地域在住者であった。また、仕事で通っていたり、以前住んでいたりするような地域とのつながりがある人々を地域に関わる人々と表現している。

先述したとおり、企画参加者、鑑賞者、つなぎ役は、それぞれ地域住民や地域に関わる人々の割合が高いため、企画参加者が鑑賞者になったり、鑑賞者が企画参加者になったりとその境界線も非常にあいまいである。つまり、企画参加者、鑑賞者、つなぎ役、地域住民の立ち位置はコンテキストによって変化しやすいものであり、それぞれを明確に分けることは難しい。芸術祭の特徴②と④にあげられているように、企画参加者、鑑賞者、つなぎ役として、プロジェクトには地域住民が多く関わっている。葉山芸術祭は地域に関わる人々によって作り上げられており、地域に根ざしているといえる。

ここからは、プロジェクト関係者へのインタビュー、プロジェクトのパンフレットやロゴマーク、フィールドワークでの出来事から、葉山芸術祭の特徴的なディスコースを概念化し、地域への影響を分析、考察していく。

3. 継承のディスコース

プロジェクト関係者へのインタビューでの二つの語り、フィールドワークでの出来事、プロジェクトのロゴマークやパンフレットに着目して、ディスコースの概念化を試みる。

インタビュー① 葉山芸術祭のこれからのビジョンについて

私1人じゃ、喋れないと思うんですけど、実行委員会の中で共有していることではないのかもしれないんですけど、(実行委員会の)議論の中で出てくるのはやっぱり、子どもたちとか、未来の世代に、芸術というかアートをつなげていこうっていうか、子どもたちへの視点っていうのは大事にしていこうっていうふうに、実行委員の中では話をしています。

ここでは、キーワードとしてつなぐという表現が確認できる。「子どもたちとか、未来の世代に、芸術というかアートをつなげていこう」という表現からは、アートを継承するという行為を通して今の世代のわたしたちと未来の世代の子どもたちがつながっていると解釈できる。アートを後世に、子どもたちへ残したいという意思が感じられ、アートを価値のあるもの、後世に残していくべき大切なもの、重要なものだという意味付けがおこなわれている。ここでAPの社会的意味をみていくと、APは次世代へアートを継承するための方法の一つであり、アートをつなげようとする想いを伝える媒体でもある。もちろん、「私1人じゃ、喋れないと思うんですけど、

実行委員会の中で共有していることではないのかもしれないですけど」という前置きがあるように、インタビュー自身の価値観を述べただけである可能性もある。しかし、その後「(実行委員会の) 議論の中で出てくる」と述べられているため、芸術祭全体とは言い切れないかもしれないが、葉山芸術祭実行委員会のなかではアートへの意味付けを共有しており、アートを次世代へつなぐ関係性やその想いを重要視しているといえる。

インタビュー② 芸術祭の今後の未来像について

最初に(プロジェクトを) 立ち上げた人がどんどんなくなっていったんですね。ついこないだも1人、重要な人物が亡くなったんですけど。立ち上がった早期っていう頃のことっていうのをちゃんと記録というか、ちゃんと話したりして、ちゃんと残さないとねって話をしてて。そういう昔の運営というか、葉山芸術祭の成り立ちから運営から現代に至るまでのことをきっちり、残したいってのが一つありますね。昔の話を聞いていると、この企画面白かったねとか、いろんな思い出話みたいなのが出てくるので、そういうなんか皆さんの記憶に残っている企画みたいなのを振り返ってみたり、あるいはまた再現するような、新しく再現してみたりしようとするみたいなのをやりたいね、とか出てますね。

インタビュー②では、インタビュー①にも表れていたように、次世代にアートや芸術祭をつなげたいという想いが確認でき、そこから芸術祭に残していきたいという意味付けがなされていると解釈した。さらに、ここでは、特にインタビュー①にはあまり表れていなかった、アートや芸術祭をつなげる人の存在にも注目したい。最初に(プロジェクトを) 立ち上げた人がどんどんなくなっていったんですね。ついこないだも1人、重要な人物が亡くなったんですけど。という語りから、葉山芸術祭の中心人物が時の流れとともに失われつつあり、それに対する危機感が読み取れる。その後の語りの立ち上がった早期っていう頃のことっていうのをちゃんと記録というか、ちゃんと話したりして、ちゃんと残さないとねって話をしてて。そういう昔の運営というか、葉山芸術祭の成り立ちから運営から現代に至るまでのことをきっちり、残したいってのが一つありますね。

これから解釈していくと、プロジェクトを今まで築き上げてきた過去を知る人がいなくなってしまい、その芸術祭の物語を後世に語れなくなることに對して危機感を抱いているのである。プロジェクトの軌跡を現在の段階で記録して、未来に残していきたいという想いがみられ、ちゃんとやきっちりといった表現を繰り返し用いられていることで、その想いの強さを感じられる。つまり、プロジェクトの過去に対して、残すべき大切なものとしての意味付けがなされている。過去を指す表現として思い出話や記憶を用いており、そこからはプロジェクトを自分たちの物語、自分事として考えていると解釈できる。

インタビュー①と②で示されているアートや芸術祭を後世につなぐ想いを実現させるためには、芸術祭の軌跡を記録として残すことの他に、地域に関わる人々に芸術祭を自分事として考えてもらうこと、芸術祭をつなぐためのネットワークが必要である。その点がどのようにプロジェクト内で立ち現れているのかを芸術祭のパンフレット、ロゴマーク、フィールドワークでの出来事から読み解く。

『葉山芸術祭データブック 1993-2015』に記録されている芸術祭のパンフレットの表紙を分析していくと、自然に関係する言葉、自然に関する作品¹²やモチーフなどが繰り返し用いられてい

たり、第18回と第19回は「海感」¹³（かいかん）というプロジェクトサブタイトルを設定されていたりすることで、自然が強調されていた（図2）。このように、パンフレットの表紙やロゴマークにおいて地域のサイト・スペシフィックな要素の一つである自然がみられる。さらにパンフレットに掲載されているロゴマークに着目してみると、そこには自然と人間が表象されている¹⁴（図3）。ロゴマークはパンフレットに第4回から継続して掲載されていたり、プロジェクトの展示やワークショップの場所を示す目印として、フラッグにプリントして用いられたりしており、ここでも自然が強調されている。

葉山芸術祭の特徴①に示されているとおり、自然は地域の資源として認識されており、地域に関わる人々にとってこのキーワードは自分事として考えるポイントになっている。加えて、海を意識した地域の家づくりが観察できたり、地域住民が「葉山町は自然があって住みやすい」と述べていたりすることからも、自然は生活に密着しており、地域の特性の一つだという認識があると解釈できる。つまり、自然というポイントを芸術祭の顔ともいうべきパンフレットの表紙や組織の理念があらわれるロゴマークに用いることで、地域に関わる人々は芸術祭を自分事と考えやすくなる。このポイントは、可視化、象徴化され、地域に関わる人々に対して、その印象付けや意識付けを高めているのである。加えて、芸術祭を年中行事や毎年のお祭りのように定期的に開催することで、イベント化、慣習化し、地域住民主体の長期的な活動をおこなうことで、その点を結晶化、地域に定着化させている。

では、つぎにアートや芸術祭をつなげるためのネットワークがどのように形成されるのかをみていく。

フィールドワークでの出来事

筆者は第31回葉山芸術祭のMONJI-open house-（以下、MONJIと表記する）¹⁵の紫陽花ドーム¹⁶のワークショップに参加した。その際に筆者は急遽代理で寸劇¹⁷へ出演し、そのお礼としてMONJIから内輪の食事会に招待された¹⁸。

ここで確認できたのは、芸術祭がきっかけとなって、普段の生活では起こらなかったであろうコミュニケーションや人と人とのつながりが生まれやすくなることである。葉山芸術祭を通して筆者とMONJIの人々との関係が構築され始めており、そのつながりは一度限りのものとなるかもしれないが、つながった者同士のその後の関わり合い方によって継続される可能性もある。実際、筆者はMONJIが開催するワークショップに数年にわたって何度か参加しており、急遽代理で寸劇への出演や内輪の食事会に招待されたとあるように、関係性が深まりつつある。企画参加者（MONJI）と鑑賞者（筆者）という関係性から変化して、筆者が企画参加者（MONJI）のコミュニティに招かれていることが確認できる。このように、アートやプロジェクトを伝えたり、広めたりする人々が生まれ、そのような人々同士がつながることで、後世へ継承していくシステムが育まれていると考えられる。

ここまで、インタビュー①と②からアートや芸術祭を後世に伝えていきたいという想いを読み取った。その後、パンフレット、ロゴマーク、フィールドワークの出来事を分析して、その想いがどのように反映されているのかを解釈した。これを〈継承のディスコース〉と呼びたい。このように、さまざまなモダルのデータを用いることで、プロジェクトへの想いを読み取るだけでなく、それがどのようにプロジェクト内で立ち現れているのかまで立体的に分析し、ディスコースを概念化することができた。



図2 第18回葉山芸術祭パンフレット

出典：山崎稔恵他、2016、『葉山芸術祭データブック1993-2015』、関東学院大学、相模湾・三浦半島アートリンクプロジェクト

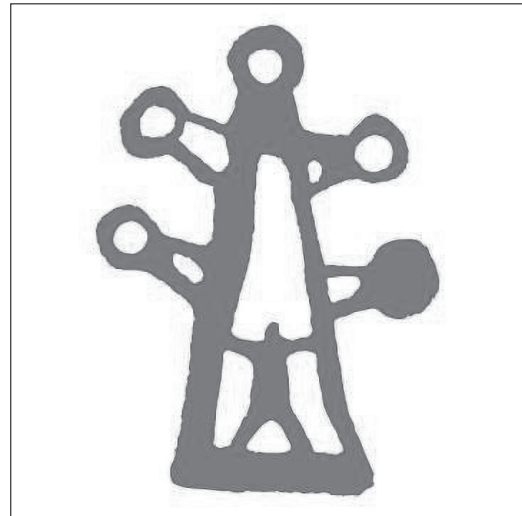


図3 葉山芸術祭ロゴマーク

出典：葉山芸術祭ホームページ
<https://www.hayama-artfes.org/>（2023年9月11日閲覧）

4. 考察

第3節では〈継承のディスコース〉を概念化した。本節では相互言説性に注目してこのディスコースの特徴をみていき、地域というコンテキストにおけるディスコースの影響について考察する。

ディスコースは単独では存在することはなく、他のディスコースと関係しながら成立する相互言説性があるため、ここで芸術祭の〈継承のディスコース〉とAPのビックDディスコース¹⁹との接合についての考察を加えていく。葉山芸術祭が始まった1990年代はAPが日本各地でアートムーブメントの一つとして発展し始めた時期であり、APのビックDディスコースの〈サイト・スペシフィック性のディスコース〉がみられ始めていた。葉山・逗子周辺のサイト・スペシフィック的な要素である自然を用いた〈継承のディスコース〉は、このビックDディスコースに接合し、影響を受けているのだと考える。

この90年代以降の支配的なAPのビックDディスコースがあることによって、葉山芸術祭のディスコースが形成されたのではないだろうか。また、葉山芸術祭のディスコースがAPのディスコースへもたらした影響については、葉山芸術祭のようなサイト・スペシフィック性の高いAPが増えていくことで、APのビックDディスコースが再生産され続けるという関係にある。このように、葉山芸術祭のディスコースとAPのビックDディスコースには相互言説性が確認でき、この関係性がAPの活動の推進力の一部になっている可能性がある。つまり、〈継承のディスコース〉には相互言説性という観点からもプロジェクトを継続させる力があると考察する。

〈継承のディスコース〉では、地域に関わる人々が生活に根付いている自然をパンフレットやロゴに表象することで、芸術祭を自分事と捉えられ、プロジェクトが受け入れられやすくなっていった。このようにサイト・スペシフィック性を取り入れることで、地域に関わる人々の生

活に根付くことが可能となり、地域への受容が芸術祭の継承、広くはアートや文化の継承につながっていくのだと考える。葉山芸術祭の変遷の転換期でアカデミックな芸術祭から生活芸術中心の芸術祭に変化したように、芸術祭が後世に伝えられていく際に、時代や地域のニーズに合わせてその姿は変化していく。つまり、未来に芸術祭を残していくということは、ただ単に後世に事実を伝えたり、その当時の形のままのアートや芸術祭を再現したりするのではない。芸術祭に関わる人々は、プロジェクトを創りあげていく過程で育まれた関係性のなかでそれを自分事として捉え、再構築していき、芸術祭は時代に合わせて形を変化させながら継承されていくのである。このときに、芸術祭を自分事として考えさせてくれ、人と人をつないでくれる〈継承のディスコース〉は芸術祭を再構築していくために大きな役割を果たしうる。芸術祭を毎年、年中行事のお祭りのように開催し、芸術祭がイベント化・慣習化されることで、〈継承のディスコース〉は結晶化され、定着していき、さらにそのディスコースが持つ力を強めているのではないだろうか。

5. 結語

第1章から第4章まで述べてきたことをまとめていく。第1章では研究の背景・目的・意義、データ収集方法、分析枠組みといった研究の概要を述べ、その際に筆者が生み出す言説的实践も社会的に構成されており、社会性から逃れられないことを前提とし、内省的な姿勢を保ちながら研究するために、さまざまな立場から芸術祭に関わり、データ収集・分析方法をできる限り詳細に言語化することでその透明化を心がけた。第2章では研究対象とした葉山芸術祭の概要、変遷、特徴を整理することで、分析対象についてのコンテクスト理解を深めて、次章の分析につなげられるようにと試みた。第3章ではさまざまなモードのデータをマルチモーダル・ディスコースアプローチで分析し、それらを組み合わせて〈継承のディスコース〉を立体的に概念化した。芸術祭のディスコースの可視化、象徴化、イベント化、慣習化を通して、地域におけるそのディスコースの結晶化、定着化が促されている。第4節では相互言説性に着目して地域というコンテクストにおける芸術祭のディスコースの影響について考察をした結果、このディスコースは相互言説性という観点からもプロジェクトを継続させる力があること、芸術祭を自分事として考えさせてくれたり、人と人をつないでくれたりするため、芸術祭を再構築し伝承するうえで大きな役割を果たす可能性があることが確認できた。

マルチモーダル・ディスコースアプローチを用いて葉山芸術祭を分析した結果、明らかになったことをもう一度まとめると、立体的に概念化された葉山芸術祭の特徴的な〈継承のディスコース〉は、アートや芸術祭を後世に、地域に残して伝えていきたいという想いが軸となっており、その想いを実現するために芸術祭の軌跡を記録として残すほかにも、地域に関わる人々に芸術祭を自分事として捉えてもらうこと、芸術祭をつなぐためのネットワークを築くことがおこなわれている。例えば、地域の特性である自然を芸術祭のパンフレットやロゴマークに用いて、地域に関わる人々にとって自分事として考えやすくしていることが確認できた。芸術祭のディスコースは、プロジェクトの長期的、定期的開催により結晶化され、地域に定着していくのである。また、プロジェクトを通してアートや芸術祭を伝えたり、広めたりする人々が生まれ、そのような人々同士がつながることで、後世へ継承していくシステムが育まれたりしている点もフィールドワークでの出来事を通して解釈できた。考察を加えると、地域の特徴的な要素である自然を用いたこのディスコースは、APの〈サイト・スペシフィック性のディスコース〉に影響を受けていると同時に、葉山芸術祭のようなサイト・スペシフィック性の高いAPの増加が、このAPのデ

イスコースの再生産につながっていることがわかった。

芸術祭の〈継承のディスコース〉とAPの〈サイト・スペシフィック性のディスコース〉にはこのような相互言説性があり、この関係には芸術祭を継続させる力があると考えられる。後世への芸術祭の継承とは、ただ単に事実を伝えたり、その姿を再現したりするのではなく、芸術祭を創りあげていく過程で生まれた関係性のなかでそれを自分事として捉え、再構築することである。地域というコンテキストにおいて〈継承のディスコース〉は芸術祭が長期的活動の推進力の一つになりうる。本研究で研究対象としたアートやAPは言葉だけでは換言できないものを表現している。したがって、マルチモーダルな視点を取り入れた分析が適切であると考えたため、マルチモーダル・ディスコースアプローチを用いた。プロジェクト関係者の語り、フィールドワークでの出来事、プロジェクトのパンフレットとロゴマークといった多様なモーダルのデータを扱うことで、芸術祭を未来につなげていきたいという想いを言語化するだけでなく、その想いがプロジェクト内でどのような形で立ち現れているのかまでのディスコースの読み取りができたのである。つまり、従来のディスコース分析やAP研究からこぼれ落ちてしまう部分を含めた分析が可能となったといえるだろう。

今回の葉山芸術祭についてのデータ分析から、〈継承のディスコース〉の見通しが得られるというのが暫定的結論であり、このディスコースは葉山芸術祭の限られた一部をみているにすぎないため、さらなるインタビューやフィールドワークなどの調査を重ね、より多くのデータを用いて厚みのある分析をおこなうことが今後の課題である。第4節で先述したように、ディスコースは単独では存在することはなく、他のディスコースと関係しながら成立する相互言説性があるため、芸術祭を形作るさまざまなディスコースを読み解いていくことで、より明確に芸術祭と地域の関係性や地域における芸術祭の役割を明らかにすることが可能となるだろう。例えば、本研究の分析で、地域の特性やサイト・スペシフィック性がキーワードとしてあがっていたが、その特性が反映されているであろう〈地域のディスコース〉を明らかにし、〈葉山芸術祭のディスコース〉との相互言説性を視野に入れた考察を目指していきたい。芸術祭の特徴の一つであげられていたように、葉山芸術祭は地域住民主体であり、地域の中に表現者、鑑賞者、つなぎ役が存在するプロジェクトであるため、地域に関係する人々で作り上げられている部分が多い。つまり、芸術祭のディスコースを生成・維持する人々は地域に関わる人々であるため、芸術祭のディスコースは地域と密接に関わっていると考えられる。したがって、芸術祭のディスコースと地域のディスコースが接合する可能性がある。この点の分析を深めるためにも地域の歴史や風土、文化などといった地域の特性についてより深く調査する必要がある。さらに加えていえば、ディスコースがアイデンティティに深く関わっているという点から、芸術祭のディスコースがプロジェクトや地域に関わる人々のアイデンティティ形成に影響する可能性について考察を試みたい。

註

- 1 その場所の環境や生活空間、歴史的、政治的、文化的な特性や固有性を活かし、重視する性質のことで、APではアーティストはそれらの点に着目し、作品に組み込むことが多い。
- 2 瀬戸内国際芸術祭(2010)や大地の芸術祭越後妻有アートトリエンナーレ(2000)でも30年の活動には至っていないため、本研究が長期的に活動するAPの実態をより鮮明にし、芸術祭の多様な側面をみることでできれば幸いである。

- 3 葉山芸術祭の展示やワークショップを企画する人々やアーティスト。
- 4 芸術祭の中心的場所の森山神社で、手づくりのクラフトやアート作品、地元のフードやドリンクが楽しめる企画。
- 5 葉山芸術祭実行委員会とHAFSの一員である兼子朋也氏。
- 6 ハリデー (Halliday, M. A. K.) に師事していた英国の社会言語学者クレス (Kress, G.) が提唱した。
- 7 自宅をアートの場として開放する展示形式。
- 8 建築家やまちづくりに関心のある人々や文化人の集まりで、このメンバーが実行委員となり運営を進めていった。
- 9 芸術祭が地域にとってどのような存在で影響を与えているかを調査して、より良くするための提案をする。
- 10 企画参加者や鑑賞者、地域住民を結びつける実行委員会の人々。
- 11 芸術祭の会場となっている葉山・逗子・横須賀・鎌倉周辺に住んでいる人々。
- 12 海に落ちている廃材や漂流物を集めて作製された作品など。
- 13 海を感じようという想いを込めて作られた。
- 14 人間に抱きつかれているような木、木の中に入っているような人間が表象されている。
- 15 オープンハウス形式で、主催者の作品展示や貝がらペインティングなどのワークショップをおこなっている。
- 16 小さなドーム状のガラス容器にアロマオイルと乾燥させた紫陽花を入れ、キーホルダーやネックレスを作成する。
- 17 MONJI で実施予定だった大人用の宝探しワークショップの一つである。
- 18 MONJI の方々の友人に演者の依頼をしていたが、当日に演技できなくなってしまったため、代役が必要となった。
- 19 Cooren(2015)によると、ピックDディスコースは、社会的背景を中心としたコンテキストのマクロレベルからの分析で、テキストをミクロレベルで分析することをスモールdディスコースとしている。

参考文献

- 川崎修良・越智郁乃編 (2021). 『創造都市における文化プロジェクトと担い手育成—フランス・ナント市と京都市を例に』大阪市立大学都市研究プラザ.
- 清宮徹 (2019). 『組織のディスコースとコミュニケーション——組織と経営の新しいアジェンダを求めて』同文館出版.
- Kress, G., & Van Leeuwen, T. (2001). *Multimodal discourse: The modes and media of contemporary communication*. London: Arnold Publishers.
- Cooren, F. (2015). *Organizational discourse: Communication and constitution.*: Polity.
- 瀬戸内国際芸術祭「これまでの歩み」<https://setouchi-artfest.jp/about/archive/> (2023年8月19日閲覧)
- 大地の芸術祭越後妻有アートトリエンナーレ「これまでの歩み」<https://www.echigo-tsumari.jp/about/history/> (2023年9月11日閲覧)
- 館美月 (2020). 「アートプロジェクトの社会的役割、効果と課題——ネイションと地域の枠組みから考察する」立教大学, 大学院修士論文 (未公開)
- 館美月 (2022). 「サードプレイスとしてのアートプロジェクト——みなとメディアミュージアムを事例として」『異文化コミュニケーション論集』20, 147-160
- 日本政策投資銀行・瀬戸内国際芸術祭実行委員会 (2013). 『瀬戸内国際芸術祭2013』開催に伴う経済波及効果」https://www.dbj.jp/pdf/investigate/area/shikoku/pdf_all/shikoku1312_02.pdf (2023年9月11日閲覧).
- Parker, I. (1992). *Discourse dynamics: Critical analysis for social and individual psychology*. Taylor & Frances Routledge.
- 葉山芸術祭ホームページ <https://www.hayama-artfes.org/> (2023年9月11日閲覧)
- 葉山芸術祭調査研究プロジェクト <https://www.hafs.jp/> (2023年9月11日閲覧)
- Halliday, M. A. K. and Hasan, R. (1976). *Cohesion in English*. Longman
- Fairclough, N. (1995). *Critical discourse analysis: The critical study of language*. London: Longman
- 箕浦康子 (2000). 『フィールドワークの技法と実際——マイクロ・エスノグラフィー入門』ミネルヴァ書房.

- 箕浦康子 (2009). 『フィールドワークの技法と実際Ⅱ——分析・解釈編』ミネルヴァ書房.
- 八木秀文 (2011). 「マルチモード・アプローチ (Multimodal approach) による授業構成に関する研究」『安田女子大学紀要』39, 183-192.
- 山崎稔恵, 兼子朋也, 松澤利親 (2016). 『葉山芸術祭データブック 1993-2015』関東学院大学、相模湾・三浦半島アートリンクプロジェクト.
- 吉本光宏 (2004). 「スペインビルバオ市における都市再生のチャレンジ」国際交流基金 (編) 『文化による都市の再生～欧州の事例から——調査報告書』国際交流基金企画部.